特集

私の考えるがん治療

多くの末期がん患者が辿るBSC（Best Supportive Care）は本当に正しいのか？

村上 正志　医療法人社団 貴正会　理事長
京都山科きぼうのクリニック

がん難民はたくさんいる

がんが進行し、さまざまな抗がん剤の効果が見られなくなった場合、担当医は苦渋の決断としてホスピスや在宅でのターミナルケアを勧めることがあります。これを私たちは「BSC（Best Supportive Care）」と呼びます。直訳すれば「患者さんに対する最善のケア」ですが、やや率直に言えば「外科手術・放射線治療・抗がん剤などの標準治療が尽きたため、退院して緩和ケアに移行してください」という意味合いを持ちます。

しかし、患者さん側からすれば、それまで親身に治療してくれていた担当医から突然見放されたように感じ、絶望してしまうケースも少なくありません。ただし、これは「保険で認可された治療がもうない」という意味であり、担当医の説明自体が間違っているわけではありません。

一方で、BSCを提示された患者さんにとっては、まるで死刑宣告を受けたように感じるのも当然です。特に、まだ自力で通院できるようなADL（生活動作）の保たれた患者さんにとっては、極めて過酷な宣告となります。

このように積極的な治療の選択肢が示されず、自ら代替手段を探し始める人々は〝がん難民〟と呼ばれています。

当院にも、そのようながん難民の方が調べて来院され、状態に応じた多様な治療を提供しています。患者さんやご家族は治療の選択肢があることに安心し、前向きに取り組まれるようになります。

その一方で明らかになるのは、多くの方がこれまで担当医の言う通りに治療を受けてきたので、BSCを告げられた時点で自身に治療の選択肢があることを知らないという現実です。「BSC」という言葉はあくまで保険診療の枠内における表現であり、その前にまだできることがあると私は考えます。

当院では、まずがんについての正しい知識を身につけていただくことを重視し、体力や経済的な面も相談しながら、患者さん自身が治療を主体的に選べるよう支援しています。

これまでは京滋地区でいち早く高濃度ビタミンC点滴療法を取り入れるなどした「村上内科医院」で診療にあたっていましたが、さらにがんに苦しむ方々の道標となることを目指し、自費診療でがん治療を専門に行う「京都山科きぼうのクリニック」を設立しました。保険診療にとらわれない柔軟な治療方針のもと、より多くの患者さんの選択肢を広げるべく取り組んでいます。

がん難民の方が、少しでも実際的な知識を得て治療に能動的に関わり、たとえ積極的治療ができない場合でも、安らかに過ごせる一助となることを願っています。

腹腔内抗がん剤治療

腹部のがんにより腹水が多くたまっている場合「がん性腹膜炎（腹膜播種）」と診断され、主治医から余命宣告を受けるケースが少なくありません。当院にもこの状態で多くの問い合わせが寄せられます。

がん性腹膜炎に対しては、可能な限り早期に腹腔内抗がん剤治療を行うべきだと私は考えます。これは、腹部に埋め込んだポート（カテーテル）を通じて、抗がん剤を直接腹腔内に投与する治療法です。

がん性腹膜炎になると、一般的な全身化学療法（点滴・内服）では腹腔内のがんに十分に抗がん剤が届かず、副作用ばかり強く、延命効果が乏しいことが多いのです。実際、大学病院やがんセンターで提示された全身化学療法のみに固執した結果、予後がかえって悪くなるケースも少なくありません。

がん性腹膜炎では、腸閉塞や閉塞性黄疸を高率に合併し、急速に悪化します。すなわち、治療開始のタイミングが生命予後を大きく左右するのです。腹水穿刺（針を刺して腹水を抜くこと）やCART（腹水濾過濃縮再静注法）も有効と言われていますが、それだけでは腹水の原因となるがん自体には効果がないため、数日で再び腹水がたまります。したがって、がん自体を抑える治療こそが最も重要です。

腹腔内投与に使用する抗がん剤は、一般的に使用されているものと同じですが、腹腔内で直接作用するため、少量で効果が得られ、副作用も少ないという利点があります。そのためホスピスを勧められた方や、90歳を超える高齢者でも安心して使用できます。数回の治療で腫瘍マーカーが激減する例もあり、効果を日々実感しています。

加えて、何リットルもの腹水が軽減されることで、患者さんの体が楽になり、気持ちも前向きになります。「1カ月もたない」と診断された方が、普通に食事を摂りながら通院治療を受けておられる例もあり、標準治療のエビデンスには含まれないような実際の延命効果を感じています。なお、この治療は胸腔内（がん性胸膜炎）にも応用可能です。

がん患者さんにできる日々の対策

ここまで進行がんに対する治療をご紹介してきましたが、そもそも「がんになりにくい体づくり」が最も重要です。

私は30年近くアンチエイジング研究を続けてきましたが、「がんと老化は表裏一体」であり、いずれも活性酸素が体のなかで過剰に

「京都山科きぼうのクリニック」の治療室
スタッフの目が行き届く開放的な治療室でがん治療に取り組む